

13 最終回：不定性と確実性

目次

13 最終回：不定性と確実性	1
13.1 グッドマンの帰納の懷疑	1
13.2 ウィトゲンシュタインの言説についてのコメント	1
13.3 基盤の不定性	2
13.3.1 無根拠な確実性	2
13.3.2 確実性の無根拠性の意義	2
13.3.3 言語における無根拠な確実性	2
13.4 現代における基盤	3
14 まとめ	3
14.1 資料・参考書	4

13.1 グッドマンの帰納の懷疑

グルー (grue) という色概念は、時刻に依存していて、過去においては緑色のものがグルーであり今は青色のものがグルーであると言われるとする。

問題は帰納についてのグッドマンの問題——『なぜ、過去においてグルーであった草は、未来においてもグルーであるであろう、と予測しないのか。』——ではなく、意味についてのウィトゲンシュタインの問題——『過去において私が「グリーン」によってグルーを意味していなかったのなら、今渡しが、草でなく空を「グリーン」と呼ぶことなど、万が一にもあるであろうか。』([2, p114])

13.2 ウィトゲンシュタインの言説についてのコメント

言説の特徴

- [A1] ウィトゲンシュタインは主張・信念は一般的言明としては表現されておらず、言説の特徴として現れている。(これ自身がウィトゲンシュタインの信念の表現となっている。)
- [A2] 議論は「具体的」である。「一般的な」言葉を論じるときも、その言葉の具体的な使用をとおして行う。(「考えるな、見よ」)

• ウィトゲンシュタインは「言語ゲーム」一般を論じることはない。

- [A3] 何か特別な言葉や考え方を不可侵な基盤として議論することはない。(言語ゲームでも同様。)

言語についての「主張」

- [L1] 言葉の意味はその使い方である、という立場を取る。(「使い方」も同様。「同様」も同様。etc.)

- 言葉とその使い方の間には必然的な関係はない。

[L2] ウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」は、絵や直観や行動を含む。

(a) 直観も「どう使うか」という考えが必要である。

13.3 基盤の不定性

13.3.1 無根拠な確実性

「確実性には根拠がない」という主張は、「確実と言われていることも無根拠にそういわれているだけである。確実性には何の根拠もなくすべてが不確実だ」という無意味な懐疑的態度を表明するものではまったくない。

しかし、素朴に考えるとき「いろいろなことが確実で確定しているので、それを土台にして、いろいろなことをしたり考えたりできる、その中で疑うことに意味があるのはごくわずかである」というように考える。

しかし、次の点が見過ごされている

- 「確実なこと」とされること（無意識に信頼していることも含めて）のほとんどは何か「確定・確実性」とされる根拠があるわけではなく、単に疑わないだけである。
- 確実だと信頼する根拠の有無（ということに意味があるとしても）と無関係に多くのことが生活と思考の確固とした土台となっている。

この点を考えるとき、何ごとかを「確実なもの」とするのは、生活におけるそれが果たしている役割の基盤性そのものに言及するのであって、なんらかの根拠や必然性によってその基盤性が説明され则认为るのは主客転倒していると思われる。「ものごとの確実性は自立しており根拠は要らない。」

13.3.2 確実性の無根拠性の意義

ところが、確実性が無根拠であるという指摘の意義はなかなか見えない。素朴に考えると、その上に築かれている人間的営為がみな無意味であることが帰結するように思える。しかし土台が無根拠であることこそが、我々が生きている（自由である）ということの核心的様相であるという見方が生じる。

内部観測は、この「無根拠かつ確実」をあらゆる相において見つめるものである。

13.3.3 言語における無根拠な確実性

たとえば、これを言語においてこの相を見つめると、人間の生活において無数の役割を果たしている言語の有効性が、ただ無根拠に有効なだけであり、「言葉や言明の意味」という確定したものがあるから有効だ、と説明できるわけではない。これが「不定性」ということが指示する様相といえる。

「われわれはいくつかの言葉をいくらでも正確に規定し精密に使えるではないか。」しかし、いくら「正確に規定し精密に使える」としても、やはり<正確に規定し精密に使える>という分割不能な長い単語が、その言葉を使うときの言葉のやりとりのある独特の様相そのものに言及するのであって、「規定の正確さ」というものが確定していて、「規定に基づいて精密に使う」ということが確定していて、その上で「正確に言葉を規定して、それに基づき精密に使う」というわけではない。

13.4 現代における基盤

人類が体験した基盤の崩壊の例が図1にある。異なる基盤に生きていた人たちの世界観を理解することは実質上不可能であると思われる。また、現代の諸基盤の関係を図2に書いてみた。

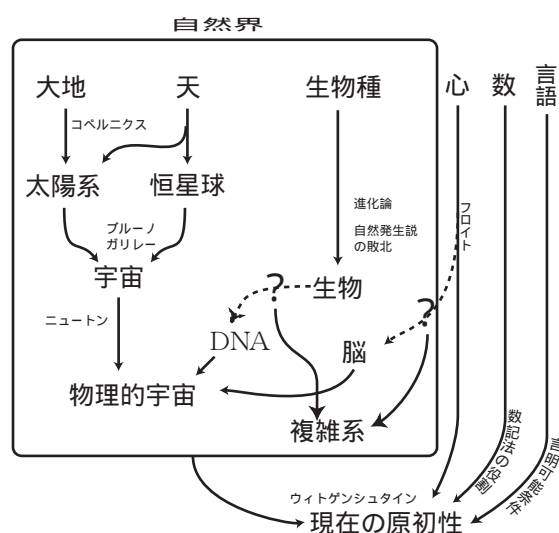


図 1: 基盤の変遷

14 まとめ

この講義ではいくつかのパラドックスを取り上げた。「解決」を目指すのではなく、パラドックスを通して「単純な発想」では見落としてしまうような重要な諸問題に関心を向けることをテーマとした。

「合理的世界像」で森羅万象を理解するということは合理的ではないという主張は、一部の人々の間では「当たり前のこと」とされているように思われる。しかし、その主張自身は、現代科学の達成したものを踏まえて合理性を徹底する中で立ち現れてくる、という様相をもたなければ、安易であるだけでなく危険なものであろう。

安易な合理主義と安易な合理主義批判とに陥らないでいるのは容易ではないが、パラドックスの吟味はその一つの方法となると思われる。

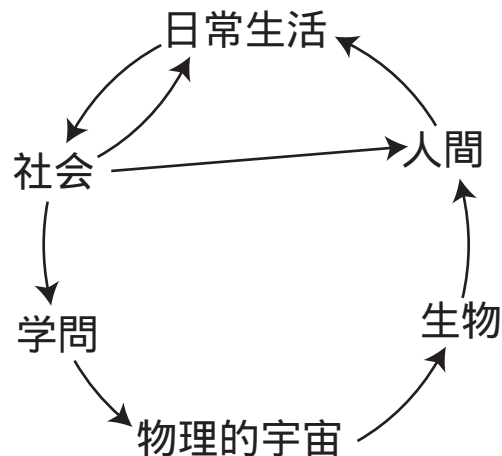


図 2: 現代の色々な世界像の基盤. $A \Rightarrow B$ は A を基盤に B を考えるということを表す。重要な点は矢印を次々と辿ることはできないことだ。サイクルがあるが、それを辿ってももとに戻っているわけではない。ふつう現代人は複数の基盤を時と場合によって使い分けている。

講義の後半ではウィトゲンシュタインの言説に重点を置いた。ウィトゲンシュタインの〈発見した〉ものの重要性にははかりしれないものがあるが、それは思想ではなく方法であることがわかりにくい。この方法を解説することは、それを使ってみることの代用にはならないのである。

14.1 資料・参考書

これまでの資料への索引は “FCS/doc/announce/sw99.html” にある。

ウィトゲンシュタインに関連する簡単な考察が拙論 [4] にある。科学の文脈での徹底した適切な解説としては [1] がある。

数理論理学への入門書は多いが [3] が読みやすい。

参考文献

- [1] 郡司ペギオ - 幸夫「生命と時間、そして原生-計算と存在論的観測」『現代思想』(青土社) 連載 (1994-6).
(目次と抜粋: “FCS/doc/mot/gunji.html”¹)
- [2] ソール A. クリプキ(黒崎宏訳)『ウィトゲンシュタインのパラドックス』産業図書, 1983. ISBN 4-7828-0017-7.
- [3] 久馬栄道「数学基礎論入門」(共立出版 1995). ISBN 4-320-01495-2.

¹FCS は “<http://fcs.math.sci.hokudai.ac.jp>” に置き換える。

- [4] 辻下 徹「生命と複雑系」p 75-224, 「複雑系の科学と現代思想 - 数学」(青土社 1998).ISBN 4-7917-9145-2.(“FCS/doc/tjst/9831cs.pdf”)